

# 『うつほ物語』宮の君と小君

— 次世代の確執 —

猪 川 優 子

はじめに

『うつほ物語』のいわゆる（蔵開）は、仲忠が母のために邸を構築しようとして三条京極を訪れる所から始発する。<sup>1</sup> 三条京極は、かつて俊蔭が居を構え、娘に琴の奏法を伝授し、仲忠自身も六歳まで過した地であったが、俊蔭存命の頃の繁栄は跡形もなく、眼前にあるのは「このほどは、野中のやうにて、人の家も見えず。さる所に、昔の寝殿一つ、巡りあらはにて、塗籠の限りみゆ。」（四六七頁）という無惨に荒廃した跡地であった。ここに仲忠は一つの「大きに厳しき」蔵を見つける。蔵には固く封が掛けられ、その結び目には俊蔭の名があった。

中納言、見給ひて、驚きて、「これは、書どもならむ。昔、累代の博士の家なりけるを、一枚書見えず。その道ならぬ琴などだに、世の中にも散り、ここにも残りたるものを。これ開けさせむ」

「蔵開上・四六七頁」

蔵の発見は、仲忠に自らの出自に対する問い直しを呼び起こした。代々の博士の家に生まれながら、学問ではなく琴の道に邁進してきた今までの在り方に対する疑問と対峙することになったのである。仲忠は、「これは、げに、先祖の御霊の、我を待ち給ふなりけり」（四七〇頁）と、自らが蔵すなわち学問を受け継ぐ者であるという自覚を持って蔵の中へと入って行く。中に収められていたのは、仲忠の予想通り数多くの書物であった。三田村雅子氏は、仲忠が蔵の中の清原家累代の書を学ぶ形で清原家累代の学業を継ぐ存在となることを指摘する。また大井田晴彦氏は、朱雀帝に仲忠が家集を進講することにより、二人の関係は君臣の絆で結び直され、仲忠の栄達を支える論理が儒臣としてのものへと切り替わると論究する。両氏の見解は、物語後半部において仲忠が一族の学問を継承する人物として造型されていることを示唆しており、首肯すべきであろう。

しかし、仲忠によつて復興を遂げた学問の家が、実は非常に脆弱な基盤の上にあるという事実が、後半部の進行とともに明らかになってくるのである。これは、継承という面から一族を捉えたとき浮上する問題であり、俊蔭↓俊蔭女↓仲忠↓いぬ宮という琴の継承が物語の巻頭から巻末まで貫かれているのに対して、俊蔭↓仲忠と引き継がれた学問相承のその後が極めて不明瞭にされている問題である。本稿は、仲忠が（蔵開）によつて切り開いた学問の家の行方を、次世代を担う人物たちから論じるものである。ここには、学問の継承だけではなく将来の一族の結束性に関わる問題が潜んでおり、そ

の問題は物語後半部の主題性にも通じることを明らかにしたい。

## 一 宮の君の誕生 —— 疎まれる子 ——

藏開・下巻、仲忠と女一宮との間に男子宮の君が誕生する。しかしその誕生は物語始まって以来例のない程の不穏な空気に包まれたものであった。女一宮の出産の苦しみは、彼女の死をも予感させ、周囲の心配と嘆きは極限に達する。中でも仲忠の狂態は甚だしく、自らの命との引き替えを願い、父への不実を詫びていぬ宮の未来を託し、女一宮へ手ずから食事を運ぶという振る舞いを見せる。そうして生まれたのが宮の君であるが、仲忠は女一宮を苦しめた元凶として疎んじる。

「神忠の語あなむくつけ。はや、追ひやれ。いと恐ろしき者なり」とのたまへば、尚侍のおとど、「さらば、賜はりて、率てまかりなむ」とのたまふ。宮、「何か。しばし。今見る」とのたまふ。大將、「いみじき目見給へるものを、何か見給ふべき」と聞こえ給へども、「何か憎かるべき」とて許し給はず。

〔國護下・八一三頁〕

宮の君の誕生の異常性は、俊蔭一族との違和を示しているといえる。殊に「大福德」の子として誕生した仲忠との違いは明白である。宮の君は、仲忠の男子として生まれたにも拘わらず、仲忠の「孝の子」としての性質を受け継いでいない。ここに宮の君の人物造型に対する疑問がある。仲忠は（藏開）の際、自らが男子であるが故

に藏（Ⅱ学問）を継承するのは母俊蔭女ではなく自分であると自覚していた。そこに誕生した男子が、当然仲忠の学問を受け継ぐ者として造型されようとの不思議もあるまい。しかし物語は、あえて仲忠が自分と相容れない「不孝の子」宮の君を授かるという展開を用意するのである。ここにいかなる方向性の追求があるのだろうか。

## 二 兼雅息小君と仲忠

楼の上・上巻、仲忠は石作寺へと物忌に出かけ、かつて一条殿に住んでいた兼雅の妻宰相上とその息子小君と邂逅する。

「神忠の語この御局の傍らにとどまりたる人、いと貴はかにゆゑゆゑしき声して、上に、人二人ばかり、下仕へなめり、人にいたうも隠れで、几帳のほころびより見えたるも、目安し。大徳の、御堂の内より来たれば、乳母なるべし、さやうの大人大人しき声にて、「この君の御こと、よかんべく折り給へや。『親におはする殿に知られ奉り給へ』と申し給へ。上いと心苦しうなむ思し嘆くを見奉る」など言ふ。「神忠の語親子あるにやあらむ。あはれなることなりや。親を見ず知らざらむよ。誰ならむ」と聞き居給ふほどに、八つ九つばかりなる男子、髪もよほろばかりにて、楯練の濃き桂一襲、桜の直衣のいたう萎れ綻びたるを着て、白うつくしげに、貴にうつくしげなる、化粧もなく、ただ、見に立ち出でて、外の方見立ちたり。よう見給へば、宮の君の顔に似たり。声は、いと貴になまめかしく、愛敬づきて、幼げにも、

物など言ふ。

〔楼の上上・八三〇〜八三一頁〕

仲忠は、偶然隣に居合わせた、父親と生き別れたらしい母子に興味を覚える。ふとした興味は、男の子の顔に実子宮の君の面影を見た時点から強い疑念へと変わり、男の子とのやりとりから素姓を知ることとなる。この邂逅は、かつて兼雅が北山のうつほで俊蔭女・仲忠と巡り会った場面を思い起こさせるとして従来注目されている。また小君は、仲忠と類似した造型を備えていることが徐々に明かされるのであるが、この点については西本香子氏が詳説されているので、以下に引用し驥尾に付したい。

加えて小君は、人物造形においても仲忠に酷似している。父を知らぬまま母とともに流離し、容貌心映え優れ、音楽にも学問にも卓越する様が、かなりな紙幅を費やして語られているのである。さらに、梨壺皇子や宮の君に比べ、母の身分が低いというハンデを天賦の資質でもっていかに克服して行くかという、かつての仲忠と同じ課題すら負わされている。そして彼の身を援けるであろう美質の中でも特に強調されるのが、母譲りの琵琶の腕前という「音楽の才」と、並々ならぬ学才なのである。さらに西本氏は、小君が仲忠の学問を受け継ぐ可能性を示唆する。この指摘は本稿においても首肯する所であり、さらに小君の学問後継者としての可能性を検討したい。

仲忠は、帝・春宮からの要請を受けて、小君を伴って参内する。

(仲忠ガ) 率て参り給ひつれば、内裏・春宮も、一所におは

しまして、「いとうつくしき人なりけり」とのたまはず。(略) 中納言、忍びやかに、「いで、その君や、うたてかたじけなけれども、この宮にやあらむなかの君にはまさり給はじ。いかに」とのたまへば、「さらに。(宮の君へ) いと見苦しう、ただ、官

の御真似をして、さがなう心強く、なまめかしき氣も侍らず。されば、宮にも、あからさまにも率て参れば、見給はで、『生まれし時より、心恐ろしき者と見き。いぬ宮のはらからにはあらざめり。率て往ね』とぞ思ひ給ふ。おとどは、ただ、心に任せて見給ふ。不用の者なり。この君、仲忠らが教へむことも聞きつべし、手などいとうつくしう書き、声もいとをかしうぞ侍る。』

〔楼の上上・八四六頁〕

西本氏は傍線部のように小君の聡明さが強調されている点から、小君への学問継承の仄めかしを読みとる。ここでさらに注目したいのは二重傍線部の「手」と「声」である。小君の手の卓越は、仲忠の能筆と通じる。国譲・上巻で仲忠は藤壺に請われて皇子への習字の手本を贈っている。

見給へば、黄ばみたる色紙に書きて、山吹につけたるは、真にて、春の詩。青き色紙に書きて、松につけたるは、草にて、夏の詩。赤き色紙に書きて、卯の花につけたるは、仮名。初めに、男にてもあらず、女にてもあらず、あめつちぞ。その次に、男手、放ち書きに書きて、同じ文字を、さまざまに変へて書けり。

(略)

と、いと大きに書きて、一卷にしたり。見給ひて、「面白き人」「いとほしくよろづのことに手惜しみ給ふ人の、さまざまに書き給へるかな。一日、戯れにものせしに、宮の、年ごろ召しつるも、今日こそは奉るなれ。この返り言は、我せむ。使は、誰ぞ」(略)

「賜はせられたる」「賜はせられたれど、『人を訪ふとも』と言ふなればなむ。この本どもを、かくさまざまに書かせて賜へるなるなむ、限りなく喜び聞こえ。なほ、この人々は御弟子にし給ひて、これならぬことも知らせ給へ。まことに、後に求められたるは、何ごとにかあめる。『我ならぬ人にや』と思ふこそ、後ろめたけれ」

〔国譲上・六五五〜六五六頁〕

大井田晴彦（忠）氏は、仲忠が書の師として藤壺腹皇子に接する姿を「字問をもつて朝廷に仕えていこうとする意思の表明」であるとす。小君の手の才能が強調されるのは、仲忠の書の師としての側面を受け継ぐ存在であることを予感させる。また小君の「声」であるが、仲忠が御前での家集の進講以来、講師としての才覚が認められるようになった一因に仲忠の声が挙げられる。仲忠は、以下に挙げるように、進講の際にも声の良さがしばしば称賛されている。

「本集の題」「手づから点し、読みて聞かせよ」とのたまへば、(仲忠ハ)古文、文机の上にて読む。例の花の宴などの講師の声よりは、少しみそかに読ませ給ふ。七、八枚の文なり。果てに、一度は訓、一度は音に読ませ給ひて、「面白し」と聞こし召すをば誦せさせ

給ふ。(仲忠ハ)何ごとし給ふにも、声いと面白き人の誦したれば、いと面白く悲しければ、聞こし召す帝も、御しほたれ給ふ。大将も、涙を流しつつ仕うまつり給ふ。悲しき所をばうち泣かせ給ひ、興ある所をば興じ給ひ、をかしきをばうち笑はせ給ひつつ、異御心なく聞こし召し暮らす。〔蔵開中・五三五頁〕

夜更け行くまに、(仲忠ノ)書読む声、誦する声も、いとあはれに面白し。〔蔵開中・五三七頁〕

（忠の）その声、いと面白し。しらくあり。声うち静めて、いと高く面白く誦する声、鈴を振りたるやうにて、雲居を穿ちて、面白きこと限りなし。〔蔵開中・五四二頁〕

さらに仲忠は、進講の際の講師ふりが評価されて、国譲・下巻、嵯峨院で花宴が催された時、二院と帝に請われて詩講師を務めている。

仰せらるる、「嵯峨院の宴」「この宴にも、ありしにもせじ。公卿たちに、役仕うまつらせむ。右大弁季英の朝臣に、判仕うまつらせむ。右大将の朝臣には、講師仕うまつらせむ」。朱雀院、「いと興あり。朝臣は、詩講師することをなむ申し侍る」。内裏の帝、「御前の講ぞ、いとになく仕うまつりき。よき今日の講師に侍り」と、皆許し給へば、大将、「さればよ。『何ごとに当て給はむ』とは思ひつる。いかで仕うまつらむとすらむ」と思はず。

(略)

花誘ふ風ゆるに吹ける夕暮れに、花、雪のごとく降れるに、大將、詩奉りに、胡録負ひて、冠に、花、雪のごとく散りて、「右の近き衛りの府の大將藤原仲忠」と申し給ふ声、いと高う厳し。

嵯峨の院、「よき講師の試みの声なりや」とて笑はせ給へど、つれなくて入りぬ。詩、皆奉り侍れば、文題取らせ給ひて読ませ給ふ。大將、参らせ給ひて、読み申し給へば、帝たちより始めて、皆見給ふ。いささか、怖ぢつらむ所なし。朱雀院、「かかる、物に心強き、物に怖ぢなき人、いかで前後知らず惑ひけむ。なほ、わが皇女を疎かには思はざりけり」と思す。やむごとなき詩どもをば誦せさせ給ふ。大將の詩を、皆帝たち誦じ給ふ。

〔国讃中・八一七〜八一九頁〕

かつて吹上で催された重陽宴では、季英の声が称賛の対象となっていたが、今回季英は判者の役を任されている。仲忠の講師としての成長が窺える場面であるといえよう。

一方小君は、実はこの仲忠にまざる声の持ち主であることが、物語に語られる。

おとど、（おとど）「小君、一日、千字文習はし奉り給ひしかば、やがて、一日に聞き浮かべ給ふめりき。詩など誦じ給ふ、（仲忠ノ）御声にはまさりためり。いと面白うあはれになむ」

〔楼の上・八五〇頁〕

俊蔭女は仲忠に、小君が詩を誦する声が仲忠以上であると評す。この、小君の声が仲忠を凌ぐというのは、琴の一族の奏法伝授の際に

親の手を子の手が凌ぐ様が語られるのと同質の論理が働いていると考えられる。ここに、小君を仲忠の後継者に位置付けようとする物の方向性が窺えよう。

また西本氏は「俊蔭の学問が血統においてではなく、人物像において相伝されるべきものであるとしたら」小君が受け継ぐかもしれないと提示する。そこで、小君が備えている資質に、血統を凌ぐ優位性があるかどうかを考えたい。ただし実際に小君の相伝が物語に描かれているわけではないので、ここでは琴の継承を参考に説明を試みたい。次に挙げるのは、俊蔭一族が琴の伝授を受ける以前にそれぞれ資質を評されている場面である。

〔俊蔭女〕

娘、四つになる年の夏より、大きに、心も聴くかしこし、父が思ふほに、（俊蔭の言）「今は、わが娘、物習ひつべきほどになりたり。わが身を捨てて習ひし琴、この娘に習はさむ」〔俊蔭・二〇頁〕

〔仲忠〕

「略」もしは、子あらば、その子十歳のうちに、見給はむに、聴くかしこく、魂調ほり、容面・心、人にすぐれたらば、それに預け給へ」と（俊蔭女ニ）遺言し置きて、絶え入り給ひぬ。

〔俊蔭・二三頁〕

かかるほどに、この子は、すくすくと、引き伸ぶる物のやうに、大きになりぬ。生ひ出づるままに、いとになくうつくしげなり。いささか見聞きつること、さらに忘れず、心の聴くかし

こきこと限りなし。

〔俊蔭・三六頁〕

いぬ宮

尚侍のおとど、「げに、その御こと（いぬ宮への伝授）をなむ、ここにも思ひ給ふる。いと篤しくもなりにたるを、さらば、早う思し立てかし。（いぬ宮へ）いと恐ろしうも、物の心、よう思ひ知りたる様におはすれば、いとよう弾かせ奉り給ひてむ」と（仲忠二）のたまふ。

〔楼の上上・八五〇頁〕

いずれの場合にも資質の卓越が窺える。琴の伝授は、無条件に血統に従っているのではない。常に、継承者として相応しい資質を備えているか否かが、厳しく問われているのである。もちろんこれは琴の継承であり、学問の継承に関する制約・条件が物語に示されているわけではない。しかし小君の資質の卓越は俊蔭一族の在り方に通じており、血統が琴の継承ほど絶対視されず、揺らぐものであるならば、仲忠→小君という継承が可能となろう。

### 三 擬似父子関係の形成

宮の君と小君をめぐっては、さらに特筆すべき点がある。宮の君は仲忠の子であり小君は兼雅の子であるにも拘わらず、物語が執拗に二組の父子の逆転を描くことである。

小君には、「まろが弟におはしけれど、子のやうに思ひ聞こえむ」など、いとよう語らひ聞こえ給ふ。いと思ふやうにめでたき様にて、かうのたまへば、見馴らひ給はぬ幼き心地には、い

とうれしくて、「まろも、思ひ聞こえむ」など聞こえ給ふに、

〔楼の上上・八三二頁〕

かくて、参り給ひつれば、若君の、この殿をば、「父ぞ」とて、むつまじう癒はし奉り給ふ。居給へる所にも、いと近うむつれ居給へり。殿をば、「殿」と聞こえ給ひて、殊にむつれ聞こえ給はず。

〔楼の上上・八四一頁〕

宮の君は、殿をば、「父君」とてむつれ奉り給ふ。大将をば、よそに見放ち奉り給ひて、「大将、参り給ふめりや」など聞こえ給ひて、ことさし放ち給ふ。宮は、大将をば、「母こそ」とつけ給ひて、いとようし奉り給へば、をかしがりうつくしがり奉り給ふ。

〔楼の上上・八四七頁〕

小君は兄仲忠を父と慕い、父兼雅に親しまない。逆に宮の君は、祖父兼雅を父と慕い、父仲忠に無関心を装う。この擬似父子関係は、小君を仲忠の継承者に位置付けようとする表れであると指摘されている。ただしこれらの関係には、看過できない問題が含まれている。すなわち、関係のひずみが引き起こす確執である。この問題について以下検討したい。

### 四 繰り返される〈国譲〉の確執

宮の君と父仲忠との隔絶は、宮の君が琴の一族から切り離された存在であることを示す。これは、宮の君といぬ宮との隔絶をも窺わせる。この事実、次世代に一族内で生じる軋轢を予感させるもの

ではないだろうか。仲忠の政治的基盤固めは、いぬ宮入内に向けて着々と進められている。その政治力は兼雅を遙かに凌ぎ、強固に築かれた人間関係はもはや盤石である。その仲忠に疎外される宮の君は、成長後極めて危うい位置に立たされることが予想されよう。

将来の宮の君と仲忠・いぬ宮との対立を思い描く時、想起されるのが国譲上・中・下巻にわたって繰り広げられた立坊問題をめぐる争いである。この争いには、姉弟間の確執（註）という重い主題が内在していた。梨壺腹皇子を擁立しようとする后宮と、梨壺の父でありながら后宮ではなく藤壺腹皇子を擁立しようとする側に立つ兼雅との確執である。兼雅が后宮に従わない背景には、仲忠が藤壺腹皇子を推しているという事実がある。兼雅は、仲忠を子でありながらしばしば親のように感じており、仲忠の意を第一に尊重する。后宮に対しては、立場上表立った反対は出来ないものの、后宮が仲忠を非難すると「坊（＝梨壺腹皇子）をば、据ゑずは据ゑず。大将（註）を、疎かには、いかが思はむ。（后宮ガ）かくのたまふが、恐ろしく、かしこきこと（七六六頁）と、激しく反発する。仲忠にしても梨壺とは異母兄妹の關係にあり、ここにも違和が存している。結果、藤壺腹皇子が立坊することになるのであるが、もし后宮と兼雅を始めとする藤原氏が團結していたならば、梨壺腹皇子の立坊も充分有り得たのである。

宮の君は、この（国譲）で繰り広げられた姉弟間の確執を踏襲する存在として登場したのではないだろうか。再び宮の君の誕生に立

ち戻る。女一宮は、（国譲）の最後に宮の君を身ごもったのであるが、仲忠に妊娠の事実をしばらく隠していた。さらに仲忠と女一宮との不和は、（国譲）の争いと並行して語られる。女一宮は、正頼の孫である故に藤壺側の立場にあり、物語中しばしば仲忠を牽制しているのである。女一宮の不安は、仲忠が梨壺側に付くことで形勢が梨壺腹皇子立坊へと傾くことにあり、后宮が仲忠等を取り込もうと画策していることに危機感を抱くのである。この女一宮の行動は、（国譲）の姉弟間の確執を助長する働きをすると見える。この、仲忠と女一宮夫婦の不和、また（国譲）の親族間の確執が女一宮の胎内で育ち、宮の君という不穩の種を世に送り出したとも考えられるのである。しかも宮の君が誕生したのは、（国譲）に決着が付き、年が明け、世の中が平安を取り戻したまさにその時である。あたかも（国譲）の終結を待っていたかのようにこの世に生を受ける宮の君は、その誕生の不吉性からも将来の不穩を予感させる。野口元大氏は、「あれだけ大きな事件となつて、物語世界の全体、またその構成人員の一人一人に激しいショックを与えたはずの立太子事件が、人間關係の表面はもちろん、隠微な心理の裏側にひそむ傷痕としても、この「楼の上」では全然見出すことが出来ない」とする。確かに立坊争いそのものは、次へと引き継がれない。しかし、国譲・下巻で誕生する宮の君と楼の上・上巻で登場する小君によって、新たな確執が生まれようとしているのである。ここに、（国譲）の負の要素を受け継ぐという宮の君と小君が持つ主題性が認められるのである。

## おわりに

仲忠の〈蔵開〉によつて復興した学問の家は、後継者問題という新たな課題を呼ぶことになった。そこに登場するのが仲忠息宮の君と兼雅息小君であるが、物語は小君の資質の優位性と、仲忠と宮の君との隔絶を描き出す。しかしここで小君が仲忠の学問を継ぐ者であると結論付けるには慎重でありたい。なぜなら、俊蔭一族の相承の系譜を辿つたとき、男(俊蔭)↓女(俊蔭女)↓男(仲忠)↓女(いぬ宮)という男女の隔世がみられるからである。仲忠は、俊蔭女という一代を隔てて俊蔭の学問を継承している。またいぬ宮は仲忠よりも俊蔭女から琴の奏法を継承している。この流れを鑑み、また血統の絶対性を重視すると、小君は政治面における仲忠の後継者であつて、一族の蔵(≡学問)はいぬ宮の代には再び封印され、さらに次の代に誕生する「聡くかしこき」男子が継承することになるのかも知れないのである。仲忠との不和が運命付けられた宮の君と、仲忠が新たに後継者として白羽の矢を立てた小君との間に摩擦が生じることは必至であり、それはいぬ宮入内後の〈国譲〉に表面化するが予感されるのである。宮の君と小君は、〈国譲〉の重い主題を背負つて登場したといえるのである。

### [注]

(1) 蔵開・上巻冒頭に、仲忠が「装束清らにせず」という理由から検非違使の別当を兼任しないことが記される。〈蔵開〉はこの

一文に引き続いて「さてあり経給ふほどに、」と始まる。

(2) 楼の上・上巻で、俊蔭の曾祖父滋野の王布留の朝臣の妻が嵯峨院の伯母であり、嵯峨院が幼少期によく三条京極の伯母邸を訪れていたことが明かされる。この地は先祖代々の居住地であつた。

(3) 仲忠の前に立ち塞がる壻・翁は、「この村は、いみじく栄えて侍りし所なり。今年、二十年あまり、三十年にはまだ足らぬほどになむ、かく滅びて侍る。(略)さりしかば、この殿は、河原人・里人入り乱れて、毀ち果てて、ただ一、二年に、かくなり侍りにき。(略)〔四六八頁〕と、三条京極の盛衰を語る。

(4) 三田村稚子氏「宇津保物語の〈琴〉と〈王権〉——繰り返しの方法をめぐつて——」〔東横国文学〕15号 昭58・3。三田村氏はさらに、「その同じ蔵の中から、俊蔭の父母の日記、家集、俊蔭自身の日記などが出現し、それらの書かれた記録を読むという行為によつて、仲忠は俊蔭の父母の恨みを追体験し、俊蔭の苦悩を知る」ことが重要であり、仲忠が真の主人公となるのは書物を読んで以降であると説く。

(5) 大井田晴彦氏「俊蔭一族復興——「蔵開」における〈書物の力〉——」〔新物語研究5・書物と語り〕物語研究会編 平10 若草書房)。

(6) ただし物語において仲忠が博士として学問を追究する姿は描かれない。蔵の書物を活用もしくはは進講する、あくまでも〈蔵



〔蔵を引き継ぐ〕姿であり、声や筆の卓越という形で表出する。ここに、果たして仲忠が〔学問〕を継いだのかという〔学問〕に対する認識の違和が残る。

(7) 高野英夫氏「うつつほ物語 宰相の君母子の物語の意味——楼の上上巻冒頭部を中心にして——」〔中古文学論叢〕20号 平12・3)は、宰相上と小君の流離が俊蔭女と仲忠の過去を想起するものと指摘する。

(8) 西本香子氏『宇津保物語』の藤氏排斥」〔明治大学大学院紀要〕29集 平4・2)。

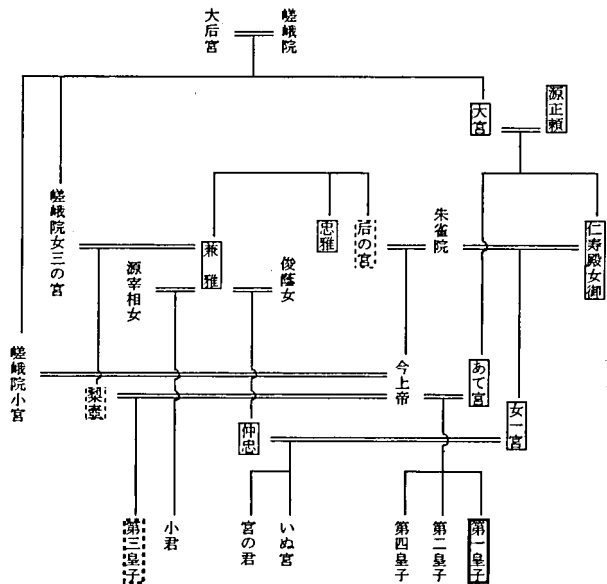
(9) 西本氏は、当該箇所その他に小君が千字文を習得する箇所(八五〇頁)頁を挙げる。

(10) 前掲注(5)の大井田論文。

(11) 俊蔭巻において、仲忠が母から手を伝授された際、「この子変化の者なれば、子の手母にもまさり、母は父の手にもまさりて、物の次々は劣りこそすれ、この族は、伝はるることにまさること限りなし」(四三頁)と評されていた。

(12) 前掲注(7)の西本論文と(6)の高野論文。なお高野氏は、「子供の子すり替えによる擬似的な父子関係を構築していることを考慮すると、父子相伝という原則は遵守されているといえなくもない。」とされる。

(13) 立坊争いにおける相関図を示す。(藤壺腹皇子側を□で、梨壺腹皇子側を○で囲む。)



(14) 野口元大氏「楼の上の世界」〔宇津保物語論集〕昭48 古典文庫『うつつほ物語の研究』(昭51 笠間書院 所収)。

\* 『うつつほ物語』本文の引用は、『うつつほ物語全 改訂版』(室城秀之氏校注 平7初版・平13改訂版 おうふう)に拠り、一部私に傍線や注記等を施した。

——いかわ・ゆうこ、広島大学大学院博士課程後期在学——